

白山下山仏

白山神社の白山下山仏と鐘

石川県の有形文化財に指定

この 13 体の仏像と鐘は、日本の歴史上興味深くも激動の時代のさなかにあった 1874 年に破壊を免れました。

像と鐘はもともと、白山の高い位置に加賀禅定道に沿って建てられていたいくつかの小さな寺に安置されていました。近代化の幕開けとなった明治時代（1868-1912）、政府は仏教と神道を強制的に分別する神仏分離という新たな政策を実施しました。仏教と神道は何世紀にもわたって平和に共存してきたにも関わらず、仏教は一転して排斥の対象となり、多くの仏教寺院が廃寺になったり破壊されたりしました。さらに、数多くの仏教の宝物も破壊されました。

この政策によって数万におよぶ仏教寺院と宝物が失われました。しかし、信心深い人々が仏像などの仏具を保管し、政府当局から隠した例も多くみられました。「下山」とは山を下るという意味で、現在尾添白山神社で見られる仏像は、山から運びおろされ、ここに隠されました。

1. 木造阿弥陀如来立像（1216）。快慶または他の有名仏師の作と考えられているこの堅牢な木像は、鎌倉時代（1185-1333）初期の正統派仏教美術の代表作です。

2. 銅造観音菩薩坐像および銅造台座。像は鎌倉時代（1185-1333）の作。現在の姿は蓮華の上に座っている観音像ですが、この像の頂部はもともと十一面観音像のものであったと考えられています。蓮華の様式は、この台座が像より後の江戸時代（1603-1868）半ばに鑄造されたことを示しています。

3. 木造地蔵菩薩立像 5 軀。室町時代（1336-1573）後期の作。

4. 木造地蔵菩薩立像。平安時代（794-1185）後期の作。

5. 銅造地蔵菩薩立像（1700）。

6. 木造十一面観音坐像（1636）。

7. 銅打出金剛童子像。鎌倉時代（1185-1333）の作。この作品の大胆で珍しい技法から制作時期を知ることができます。日本中世における白山信仰の重要な史料です。

8. 銅打出不動明王立像（1702）。

9. 銅鐘。